

# 大学図書館問題研究会 京 都

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34 京都橘女子大学図書館 田北十生気付  
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

## 新春近畿4支部合同例会のご案内

テーマ：「震災をどう記録／記憶し続けるか」

日時：1999年1月23日（土）14時30分開始

会場：三宮勤労会館 4階 405号室 TEL 078-232-1881

（JR、阪急、阪神三宮駅東徒歩3分 サンパル南 三宮図書館ビル）

講師：「震災資料の保存と公開について」

－神戸大学付属図書館「震災文庫」を中心に 稲葉洋子氏

：「資料・史料のぬくもりについて」

－「震災・まちのアーカイブ」の活動について 寺田匡宏氏

講演会后、フェニックスプラザ（大震災復興支援館）の見学及び懇親会を予定。

### 懇親会

時間 19:00～21:00

会場 TWILIGHT BAR リトル上海（神戸市中央区下山手通1-3-5）

TEL 078-333-8428 （三宮駅北側、東門筋真ん中あたり左側、黄色いビル）

会費 5,000円（込）

参加申し込み先 締め切り1月18日（月）

- ① メールリスト参加者→「yurikamome」に送信
- ② E-mail odate@kyotogakuen-u.ac.jp （事務局長 大館さんへ）
- ③ TEL 0771-29-2294

（京都学園大学図書館 大館宛）



目次	新春近畿4支部合同例会……………1頁
	京都精華大学情報館見学会感想……………2頁
	感想と会員情報……………3頁
	大阪支部研究集会の報告……………4頁
	連載小説（13）リュウ……………5頁
	教珠つなぎ（33）……………6頁

ご意見・ご要望、投稿はメール、又はFAXで  
編集気付（kazuodesu@ma2.justnet.ne.jp）田北まで



## 京都精華大学情報館見学会に 参加しての感想！

11月28日(土)午後2時から行われた京都精華大学の情報館見学会には20名の方が参加されました。この見学会のために貴重な時間を割いていただき詳細な資料を準備し、半日案内をしていただいた京都精華大学情報館の職員のみなさんにこの場を借りて厚くお礼と感謝を申し上げます。また、今回の見学会につきましては、立命館大学の若井さんに仲介の労を取っていただきました。彼も京都精華大学情報館の利用会員だそうです。

### \* 京都学園大学図書館の脇本です。

先日はきれいな図書館を見学させていただきありがとうございました。学生数3000人規模であれだけの設備と体制を維持していくにはかなり努力されているようにお見受けしました。新築されるまでの経過、かなり議論をふまえてこられたことと思います。本学の図書館でも、利用者のことを考え、学内LANの導入、CDサーバーによる検索機能の充実など、かなり便利にされてきています。私は、その中で、あれこれぶつぶつ文句を言いながらやっている次第ですので、とつても偉そうなことはいえませんが、利用者にとだけ使ってもらえるか、そこに力を入れていきたいと思っています。我々が、学生時代の時のようにほとんど勉強していない、卒論を書くようになって初めて図書館にこもったという落ちこぼれの学生を一人でも多く作らないように最大限の力を発揮していかなければと思うところです。

### \* 大館@京都学園大です。

館内が開放的なのが良かった。正面玄関からはいったホールと事務室の間に壁がないのでその分よけいに広く感じられる。3F閲覧室の中に和室があって、畳の上で読書できるのも面白かった。

専任職員が少ないのには驚いた。情報館は7部門に分かれているが、いちばん大きな図書館部門でも専任職員はたった1名。後は9名の派遣職員で業務をこなしているという。

専任職員はマネジメントに専念し、現場の実務は派遣職員が担っている。最近よく話題になるアウトソーシングのいきつくところをみた思いである。全員女性だったと思うが、研修などはどうしているのか。相互協力担当者などは他大学との交流が必要だと思うが、京都地区の相互協力連絡会などに彼女たちは参加していないと思う。派遣職員の身分ではそれも無理なのだろう。この方たちと意見の交換ができればと思う。

### \* 村上健治@阪大です。京都精華大学情報館を見学して

大学の図書館・AVセンター・博物館・情報処理・出版・生涯学習・研究所の7つの部門を「情報館」という一つの組織としてまとめ、情報の収集・整理・利用ばかりではなく、情報の積極的な発信を試みている京都精華大学情報館を見学しました。

概要の説明を受けた後、施設を見学しました。情報館は、地域への開放と視聴覚機器等の積極的な提供をしています。地域への開放では、登録料が必要なこと、地理的に少々不便などところにあることにもかかわらず、学外の利用者は千人を越えており、一般の市民の他に他大学の学生の利用も多いとのことでした。

閲覧室に設置されているパソコン・ビデオ等の機器の多さは、大変印象的でしたし、閲覧席が長方形のものばかりではなく、円形のものまで置いてあり、また、和室(座敷)があること、窓際のかなりの部分を閲覧席にしているなど多様な試みがされていました。

職員の少なさがとても気になりましたが、情報館の多様なサービスの試みは、今後の図書館のあり方の一つを示すものであると感じました。



## \* 京都大学原子炉実験所図書室 金森孝之です。

京都精華大学はどこにあるのか。叡山電鉄鞍馬線の京都精華大学前駅にある本当に駅前の大学でした。駅は大学の一部のようでした。中の喫茶店で一休み。

コーヒー一杯が120円と安い。2時より、情報館の見学会開始。以下 感想。

- (1) 雇用形態について、一部の職員を除いてほとんどのスタッフは、派遣職員とのこと。これが現代風なのか。教育、研修、図書館員としての意識はどうなるのか。
- (2) 情報館は積極的に情報発信をしようということで、出版もやっていました。売れ行きもいいようです。1冊もらえてラッキー。
- (3) 利用者がセルフ・サービスで使う自動貸し出し装置は、真っ赤で斬新なデザイン。あのスリーエムの製品と同一機能のようですが、別会社と共同開発したとのこと。貸し出し専用利用。資料の返却は、情報館の玄関横の返却ボックスへ。どこにでもある返却ボックスとは違っておまして、裏から見ますと、本は返却口を通るとスルスルとスロープを滑って行ってから返却箱に落ちます。当初、このスロープの途中で返却用の読み取り装置を付けようという計画だったそうですが、無理であったとのこと。これで自動返却が可能であればすごい。
- (4) 情報館は一般市民にも積極的に開放されております。実際のところ市民開放にも消極的から積極的まで各大学の図書館で幅があるようです。館内には、親子連れ、年配の人もおまして、公立図書館のようでした。
- (5) 情報館内では無線LANでつながるノートパソコンが貸し出されていました。このノートパソコンはスイッチを入れるとLANにつながるとのこと。情報館内であれば、どこでも利用可能でいっぱいだったとのことでした。国立大学ではコンセントといっていますが、機能性に富むこちらの方が断然いい。
- (6) 芸術系の大学のため、ビデオ撮影機、録音機等の機材も貸し出しているとのこと。その編集のための部屋もありました。また、小さいですがスタジオもありました。大学の授業とタイアップして、AV機材を利用した学習、研究ということにも情報館は協力しているのです。

などなど、たいへんに有益でした。貴船の忘年会も楽しかったです。今度は家族でボタン鍋を食べにいきたい。

## 感想と会員情報

立命館大学 若井さんが人事異動で職場が変わるそうです。

以下若井さんのメッセージです。

前略

過日の11月例会(京都精華大学情報館の見学)ご苦労様でした。

感想はそれぞれ出されると思いますが、受入館はそれなりの努力をしてくれたようです。小さな私立大学らしさがいろんな面で特徴を出していたと思います。

勿論、情報発信や教育研究に貢献すると共に、地域に開かれた大学づくりに力を注いでいるのは評価できるのではないかと思います。なりふりかまわぬアウトソーシングもさりながら、目的意識的にポリシーを据えて考えられればと思います。

みなさん 配布された資料を閲覧されましたか。棟方志功展、木野評論とも中味は結構面白いですよ。マンガ特集などなかなかのものだと思います。

ところで、小生 職場が替わりました。

立命館大学衣笠学生センターとなりました。翻意ではありませんが、大学と学術の発展のため、違った視点から取り組んでいきたいと思っています。勿論図書館についても継続して自分の仕事として取り組むつもりです。

連絡先は電話 075-465-8168 (FAX 075-465-8169)です。

今後とも宜しく。

1998.12.2 若井 勉



## 大阪支部研究集会

# 『情報流通と大学図書館』に参加して！

大館和郎

最初に北克一氏（大阪市立大学）が基調報告をおこなった。情報を電子化することによってどういう状況が生じるかという観点からみていくと、まず技術の革新による既存技術の陳腐化によって、記録を次々と移し替えないといけない事態が出てくる。たとえば8インチのフロッピーディスク装置を持つパソコンが消えて行ったように。又企業間の競争により消え去ってゆく技術がある。かつてのVTRのベータ方式のように。それから統合されたDDS（ドキュメントデリバリーシステム）が構築されることによって、資料の所有より資料へのアクセスが重視されることになる。その結果として所有とアクセシビリティの相剋。

報告の中で印象に残ったことがいくつかあった。たとえば利用者の使用する道具とプロである図書館員の道具—OPAC—が同じであってよいはずがないという主張。

ネットワーク環境が整備され、研究室や自宅から情報に直接アクセス可能になることによって、図書館員の役割が変貌しつつあるという状況を直視しなければいけないと強調された。

続いて茂幾周治氏（大阪医科大学図書館）の事例報告1「医学図書館におけるドキュメント・デリバリの現状と今後の課題」があり、始めに日本医学図書館協会（JMLA）の活動状況の紹介があった。複写利用状況（国内のみ）でみる限り、大阪医大図はJMLA加盟館の中ではほぼ平均に位置する。\*（1997年度複写依頼件数：加盟館平均 3646 大阪医大 3122 1997年度複写受付件数：加盟館平均 5685 大阪医大 5317）外国雑誌購入経費（6343万円）および購入タイトル数（814）は全国平均（4300万円、546）を大きく上回っている。しかし外国雑誌の値上がりに伴い、購入雑誌をカットすることになり、情報入手の代替え措置として、BLのinside webと、UMI社のProQuest Directシステムを導入することになった。ProQuest Directとは、UMI社が雑誌や新聞のフルイメージ、フルテキストをインターネットを経由して全文データベースを提供するもの。加えて電子ジャーナルも積極的に利用している。しかし他大学図書館からILLで申し込みがあった場合、ライセンスの関係から、引き受けることが出来なくなる。これに関しては論文単位で切り売りの支払い方式が実現するかどうか鍵という指摘があった。

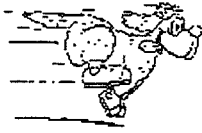
最後に篠原俊夫氏（京都大学総合人間学部図書館）の事例報告2「アメリカの大学図書館におけるドキュメント・デリバリの現状」があった。情報量の増大、雑誌価格の高騰、情報伝達手段の高度化などにより、自館で所蔵できない文献への要求に対して、ILLが応えてきたのだし、それは今も変わらないが、そのILLの延長線上にドキュメント・デリバリを位置づけられた。次にILLとドキュメント・デリバリとを比較して、ILLが無料で情報の入手が遅く、ドキュメント・デリバリは有料で情報の入手が速いことが挙げられた。ILLが米国では無料というのは日本との大きな違いである。続いてドキュメント・デリバリの共同利用の観点からライブラリー・コンソーシアムについて触れられた。

ライブラリー・コンソーシアムとは図書館がさまざまなかたちで協力関係を築いているグループのことであり、一見目新しい言葉であるが、従来から図書館同士は協力してきたわけであるが、この言葉によって、図書館間のさまざまな協力形態が統一的な視野のもとに整理して、とらえる事ができる。

今回の集会は学術情報と大学図書館をめぐる現在の状況がさまざまな角度からとりあげられていたが、1年後にはすでに様変わりする可能性もあるほど変化がはやいので、継続的にフォローできる機会が必要ではないかと思った。

（おおだて・かずお 京都学園大学図書館）

新連載小説 第13回



## リ ュ ウ

作 西田 治

10年も経ているのだから利息だって少しは付いているはずだし、全部解約したら、子供の小遣いくらいなるのではという思いがしてきた。それから捨てるでも遅くはないのではと思った。もしかするとコーヒー代だって出るかもしれない。いや、うまくいくと1ヶ月のタバコ代ぐらいは。ひょっとするとそれ以上あるかも。だとすると一杯飲めるんじゃないだろうか、だんだん思いが膨らんでいく。思わず口の中に唾液が広がった。

圭子の知らない小遣いが出来る。宝くじでも拾ったような、いや宝くじより額は比較にならないだろうけれど、確実に手にはいるのだと考えると胸がわくわくしてきた。私は早速明日、銀行へ行ってみようと決心した。

翌日、私は予定通り午後から休みを取って、車で銀行に乗りつけた。通帳を出して解約したいというと「そちらで少々お待ち下さい」と言われた。暫く待つと「大友敏之さま」と大きな声で呼ばれた。わくわく気分で窓口に行くと「あの、これ住所が違うんですが」という。「ええ、引っ越したんです。」と面食らって応えた。「では、申し訳ありませんが住所変更届けを出して下さい」と用紙を渡された。私が記入して渡すと、「では、そちらで少々お待ち下さい」とまた待たされることになった。

「大友敏之様」という声に、やれやれと思って窓口に行くと「あの、申し訳ありませんが、印鑑がお届けのものと異なりますので、お届けの印鑑をお願いしたいんですが、今お持ちでしょうか?」という。圭子が預金をするときに私の名でするのはいいんだけど、適当に手元にある印鑑で届けるので、もう通帳印はバラバラ。それでも、私は一応確認して持ってきたつもりだったが、違うと言われると、どうしようもない。

「違うんだったら、もう、その印鑑なくなっていると思うんですが……」と困り果てていった。

「じゃ、改印届けが必要ですので」とまた、用紙を渡された。「それから運転免許証か何か身分を証明するものをお持ちですか?」というので運転免許証を出す。するとまた、「そちらで少々お待ち下さい」である。

三度目に名前を呼ばれて「大変お待たせしました。全部で六百十円です。お確かめ下さい」と通帳と現金を渡された。私は赤面してしまった。大勢の人がいるところで「全部で六百十円です」って、そんな大きな声でいう必要はないのにと考えた。私は通帳と現金を受け取ると確かめもせず、窓口を離れた。

私の背に「ありがとうございました。またのご来店をお待ちしています」と窓口の行員の声を追かけてきたが、私には皮肉に聞こえた。

そんなことを次の銀行でも、その次の銀行でも繰り返し、得たお金は全部で千九百十六円だった。私は、あのわくわくした気分はとっくに消え失せて、すっかり落ち込んでしまった。おまけに疲れ果てた。

(次号に続く)

